【実行委員後記】

初めてのミニ・レビュー論文に取り組んだのが修士課程 1 年の冬でした。それから数えると、ゼミでの企画書・骨子・草稿の討議検討を経てとにもかくにも書き上げるまでに2年半かかりました。そして、実行委員として校正等の作業に取り掛かって約3か月、やっと形になったという気持ちと、もしかしたらまだ見落としがあるのではという不安がない交ぜになっています。慣れない校正作業とはいえ、執筆者の皆様そして昨年度の実行委員の方にはたびたび照会を繰り返してご迷惑をお掛けしました。

しかし、この間の執筆・改稿そして校正の作業から得たことは多々ありました。何よりもまず、M1 時代には「レビューなんて大家がやることで、私にはとてもできない」と思っていたのですが、自分が抱いていた疑問に対して今の段階での答えを出そうとしたことです。レビュー論文を書くことで、研究課題というものはどこかから降ってわくようものではないことを、改めて思い知った気がします。また、査読の方からのコメントに対してどう答えるかを考えることは、何ものにも替えがたい自分の勉強になりました。さらに、昨年までの既刊の3冊も目を通してはいましたが、実行委員として今号の掲載論文を繰返し読んだことで、自分の研究テーマ以外の分野について本当に多くのことを学びました。そして、論文の最後の仕上げでは何に注意をするべきかも、少しわかりました。これは余禄と言っていいでしょう。

今回は収録論文が少なめでしたが、こんなに得るものがたくさんあるのですから、次の号はぜひぜひ多くのいろいろな方が投稿して下さるとうれしいと思います。

（石井　怜子）

このレビュー論文集シリーズの初年度版を目にしたのは、私がちょうど大学院の受験を控えていたころでした。当時から今日まで、このレビュー論文集にはずっと憧れの気持ちを抱いてきましたが、まさか私自身の論文がこの 2005 年版の論文集に掲載され、且つ私がその編集作業にかかわるとは、思いもよりませんでした。これまで出版されたものと比べ、今回は収録論文数が少ないものの、一編一編が二十数ページを超える大作揃いです。私自身がこのレビュー論文集に投稿したいと思いはじめてから、ゼミでの計画・論文スケルトン・論文草稿の発表を重ね、最終的に書き上げ・投稿・採用までかかった一年半を顧みると、生みの苦しみと収穫の喜びの入り混じった複雑な思いがこみ上げてきます。そして、おそらく他の論文の著者たちも同じような思いを抱き、今日を迎えたのではないでしょうか。

このような著者たちの心血を注ぎ書き上げた論文原稿を一冊の本にするのに、さらにどれだけの時間と労力が必要か、今回の編集作業にかかわったことにより、垣間見た思いがしました。書籍の編集には無縁だった私たちに、代々の実行委員の方々によって築かれたノウハウを前回の実行委員向山さんが丁寧に伝授してくださったこと、また、論文執筆者の方々が私たちの不慣れな編集作業に協力してくださったことが無ければ、こんな短時間に印刷・出版にこぎ着けられることもなかったでしょう。また、同じ編集仲間の石井さんの仕事ぶりや、辛抱強さを目の当たりにして、私はこの編集作業からも様々なことを学ぶことができました。

そんな多くの方々の協力と論文執筆者の努力によって誕生したこの論文集を一人でも多くの方に読んでいただけることを願ってやみません。

（楊　虹）

2005 年 11 月
編集事務局実行委員